

氏名（本籍）	卯田 卓矢		
学位の種類	博 士（ 理 学 ）		
学位記番号	博 甲 第 7335 号		
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	生命環境科学研究科		
学位論文題目	A Geographical Study of Tourism's Impact on the Spatial Restructuring of Mount Hiei（ツーリズムによる比叡山の再編に関する地理学的研究）		
主査	筑波大学教授	博士（理学）	松井 圭介
副査	筑波大学教授	理学博士	山下 清海
副査	筑波大学教授	理学博士	村山 祐司
副査	筑波大学教授	Ph. D.	呉羽 正昭

論 文 の 要 旨

聖地とツーリズムに関する研究は、近年、従来の実体論から構築論的な聖地理解や世界的な聖地巡礼の隆盛などを背景に、多様な観点から研究が進められるようになった。その中で、ツーリズムによる聖地の構築および変容における宗教者、地域住民、観光業者などの各アクターの動向に着目した研究が存在する。しかしながら、聖地管理者である教団の活動に焦点を当て、ツーリズムとの関係を本格的に論じた研究はみられない。ツーリズムは宗教活動の促進や活性化において重要な役割を担うこともあり、教団がツーリズムといかに結びつくことで聖地の発展を進めたのかを検討することは重要な意味を有する。また、ツーリズムとの関係を含めた聖地のあり方は教団の判断に大きく依存するという側面をもつ。そのため、ツーリズムが進展した近代以降の聖地の動態や、聖地におけるツーリズムの意味を理解するには教団の活動に注目することが重要となる。

本研究は以上を踏まえ、聖地管理者である教団の活動に注目し検討することを通して、ツーリズムによる聖地の再編プロセスを明らかにすることを目的とした。具体的には戦前から戦後期の比叡山延暦寺を取り上げ、ツーリズムと聖地を結びつける上で重要な要素となる観光媒介（移動手段、観光情報）と延暦寺の活動との関係について検討した。その結果、以下の点が明らかとなった。

延暦寺は開創以来、天台僧の学問や修行の山としての性格が強く、参詣者の獲得に対する関心は高くなかった。しかし、大正中期ごろになると、一般の伝教大師に対する忘却への危機感などから、思想の喧伝や参詣者の受け入れの重要性が自覚されるようになり、当時計画中であった坂本方面からのケーブルカーの建設に同意した。また、延暦寺ではこのケーブルカーと既設の京都方面からのケーブルカー、ロープウェイに注目し、参詣者のアクセスの向上および風致保護を目的に、参道改修や霊域地・保勝地の設定などを実行した。

戦後、1958年に比叡山ドライブウェイが開業すると、延暦寺は参詣者を経済的基盤とした運営方針を背景に、これまでの学問・修行を中心とした山から伝教大師の教えを広める場、すなわち「大衆への転法輪の場」と自らを再定位し、信者を含む参詣者を対象とした教化活動を行った。また、第二のドライブウェイの開業を機として、東塔、西塔、横川の各地区にわたる大規模な境内整備を実行し、受け入れ態勢の充実を図った。特に横川地区では新たにドライブウェイが開業され、多くの参詣者の来訪が予想されること

から、施設の改修・新設が重点的に行われた。延暦寺はこの一連の事業を記念法要に合わせて実施することで、天台宗内外に対し「大衆への転法輪の場」としての新たな延暦寺を積極的にアピールした。さらに、延暦寺は先の教化戦略の転換を踏まえ、参詣者の誘致活動を開始した。その後、「参拝の奨励、誘致」を専門とする参拝部が新設され、信者に加えて、一般参詣者（団体・個人）、修学旅行生に対する誘致が本格的に進められた。

こうした多様な対象への誘致活動は、信者（檀家）との関係が希薄な寺院構造や、それと関連した経済的基盤の脆弱性を背景とした「営林」から「諸堂収入」への経営構造の変化、および当時活発に進められていた教団再編成運動の一環として位置づけ直されたことにより、一層重要視された。以上の一連のプロセスから、延暦寺は宗教活動を促進させるために、観光媒介の主要素である移動手段と観光情報を積極的に活用し、教化戦略や境内空間を再編させていったことが明らかとなった。

本研究の対象地域である比叡山は、ツーリズムと結びついた都市近郊の霊山と共通した傾向を有していた。これらの霊山では戦後の社会構造の変化の中で、信者以外の外部との関係の構築に寺院運営の活路を求め、延暦寺と同様に観光媒介を積極的に活用する傾向にあった。このことから、本研究で明らかとなった延暦寺の一連の活動は、都市近郊の霊山における聖地管理者の一般的傾向として位置づけることができた。

審 査 の 要 旨

聖地とツーリズムに関する研究は、従来の実体論から構築論的な聖地理解への転換や近年の世界的な聖地巡礼の高まりなどを背景に、多様な観点から活発な研究が進められている。しかしながら、聖地管理者である教団の活動に焦点を当て、ツーリズムとの関係を本格的に論じた研究は地理学のみならず、隣接諸分野においてもみられない。

これに対し、本研究は精力的なフィールドワークにより得られた教団側の多数の内部史資料を使用することで、ツーリズムに対する教団の取り組みの全貌を当時の社会的、宗教的コンテキストを踏まえ、実証的に分析した。そして、教団が宗教活動を推進するために、観光媒介の重要な要素である「移動手段」と「観光情報」を積極的に活用し、主導的に聖地を再編していたことを明らかにした。この聖地の再編における教団の活動実態の解明は、先行研究に対するオリジナリティとして高く評価されるものである。

また、本研究では対象地域である比叡山がツーリズムとの結びつきをもつ都市近郊の霊山との一般的性格を有していることから、ツーリズムによる霊山の再編プロセスのモデルが提示された。以上の点から、本研究は近代以降における日本の聖地の理解および宗教地理学の進展に寄与する重要な研究として位置づけられ、博士論文として十分な価値があることが認められる。

平成27年2月5日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもとに論文の審査及び最終試験を行い、本論文について著者に説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものとして認める。